

リニューアルレポート

4

津田 卓子

公式ロゴ・シンボルマークが完成しました。

シンボルマークは当館の特徴的な建築シルエットと館英名「NAGOYA CITY MUSEUM」の頭文字「NCM」を組み合わせた図形、ロゴタイプはシンボルマークの図形群を元にして新たに生み出した書体です。ベーシックカラーのうち、金色は名古屋城の金鯱をイメージしたのですが、もうひとつの青色は高力猿猴庵の本が由来となっています。なんといっても猿猴庵が書き残した豊かな記録は当館の活動を支える大きな柱のひとつ。世に残る猿猴庵の著作物のうち、小田切春江旧蔵で伊藤次郎左衛門家に伝来した本は全て同じ浅葱色の表紙を持ちます。本誌二三八号でもご紹介したとおり、視認性を高めるため浅葱色から明度を下げた色合いに調整しました。

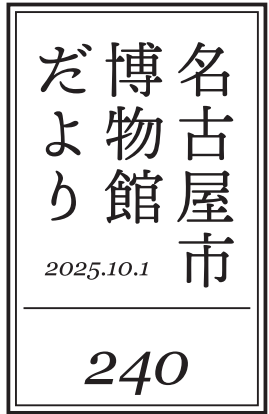
これから活用を図っていきますので、どうぞお見知りおきください。

(次ページへ)



中空耳環

—名古屋市博物館所蔵資料より2例の報告—

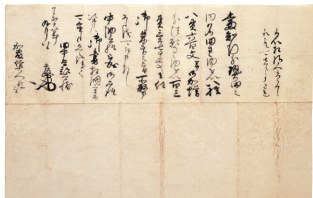


リニューアルレポート 4



豊臣氏による尾張国支配のはじまり

天正十八年九月八日付
田中吉政書状を手がかりに



名古屋博物館だより 240 号
令和 7 年(2025) 10 月 1 日
年 2 回(10 月、4 月)発行

編集・発行／名古屋博物館
〒 467-0806
名古屋市瑞穂区瑞穂通 1-27-1
TEL 052-853-2655
FAX 052-853-3636
<https://www.museum.city.nagoya.jp>

古紙を含む再生紙使用

再利用

令和七年(二〇二五)春から第二期工事にとりかかっています。そのうち既設材をそのまま利用する外壁は、この機会に洗浄することになりました。施工業者によれば、水圧が強くて既設塗装材が崩れてしまうので、ほどほどの強さで行うのが肝要とのこと。なんと外壁一パネルあたり六分かけて丁寧に洗っていきます。作業が進むと、うつすらピンク味を帯びた壁が現れました。あたかもお肌のくすみがとれたかのよう。はつきりとした違いではありませんが、全体ともなれば、明るい印象を与えてくれるのではないかと期待しています。今回のリニューアルでは、実施設計パース図のとおり外観は大きく変わらないものの、内装を大幅に変更します。しかし、ごくごく一部に既設材を再利用しようと考えています。当館の建物自体も名古屋市の歴史を物語るひとつなので、はたして開館した昭和五十二年(一九七七)当時のよすがを残す、何の部材がどこに使われるか。出来上がりをお楽しみに。



写真1 洗浄前(右)、洗浄後(左)の外壁パネル



写真2 常設展示システムモックアップ



写真3 サインサンプル現地確認

五月には、常設展示室の展示システムについて、モックアップ(実物大模型)で確認する場が設けられました。ケースの高さや位置は問題ないか、パネルの大きさはどうか、適した文字数か、障害を持つかたに分かりやすくなっているか。さまざまな課題が浮かび上がります。とりわけキャプションの背景色はなやみどころ。各章ごとのキーカラーを用いたテーマキャプションのほか、個々の資料解説キャプションについては、これまでの常設展と同様、白地に黒字のボタンに加え、黒地に白字ボタンも施工業者より提案されました。今回のリニューアルではユニバーサルデザインを意識しており、点字表記や触知図、多言語化はもろんのこと、色も重要な検討材料になっているのです。前者は更新の利便性に優れる一方、読みやすさは後者に軍配があります。いずれの案も一長一短があり、安易に結論ができません。しかし決めていかなければいけない。何を優先して決定するか。なやみ日々がつづくのです。

館の顔
屋外サイン、館内サインもユニバーサルデザインを構成する大きな要素です。七月と八月には、サインを担当するデザイナーや施工業者とともに、実物大に印刷したサインを現地で確認する作業を行いました。なるべく見やすいように、直感的に情報が伝わるように、サインとしての統一がはかれるように配慮しながら協議を重ねます。
正面玄関の底には、このたび作成した公式ロゴ・シンボルマークを配置します。幅三・八メートルほどの大きな帯状のサンブル紙を実際の場所にあててみました。当たり前ですが、図面や会議室でみたときと現地では、距離や光の当たり具合で大きく印象が異なります。
冒頭でお伝えしたとおり、シンボルマークは館の外観がモデルとなっています。博物館の外観全体を視野にいったとき、たとえば前庭の入り口あたりから遠望してみると、その相似関係が良く分かります。きっと当館の新しい顔として機能してくれることでしょう。

豊臣氏による尾張国支配のはじまり

—天正十八(一五九〇)年九月八日付田中吉政書状を手がかりに—

羽柴 亜弥

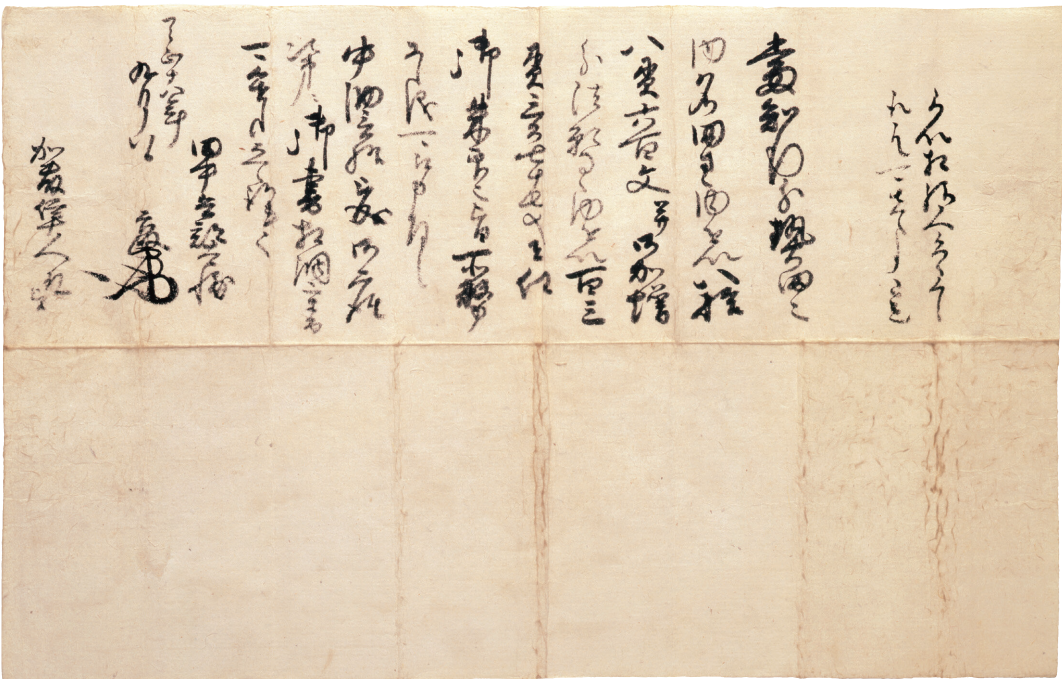


写真 天正十八(一五九〇)年九月八日付田中吉政書状(個人蔵)

〔翻刻〕
尚以相給人各々二て
取候て、可遣候事、已上、
当知行分熱田之
内名田方之内を以八拾
八貫六百文、并御加増
分法願寺之内を以百三
貫三百七十七文を、
御朱印之旨所務
等之儀可被申付候、
中納言様被成御座
次第二御書相調重而
可進候、恐々謹言、
天正十八年 田中兵部太輔
九月八日 吉政(花押)
加藤隼人(景延)様
まいる

〔意識〕
なお、相給人^(注1)でそれぞれ土地を分割して(年貢を)おさめなさい、已上、
現在あなたが支配している熱田(愛知郡)にある名田方の内88貫600文^(注2)をあわせて、御加増分として法願寺の内103貫377文を、
御朱印の内容のとおり支配をするように申しつけられました。
中納言様(豊臣秀次)がご到着なされましたらすぐに、(秀次からの)正式な文書を準備して再びお届けします。
恐々謹言。
天正十八年 九月八日 吉政(花押)
田中兵部太輔
加藤隼人(景延)様
(注1) 相給人……ある場所を複数人で分割して支配していた人達。
(注2) 88貫600文:土地を年貢高であわしたものの。
(注3) 御朱印……秀吉の朱印が押された文書。

天正十八(一五九〇)年七月、豊臣秀吉は小田原の戦いで後北条氏を倒し天下統一を成し遂げた。戦いの後、武将たちの領国を決める際、秀吉は尾張国の領主・織田信雄を改易し、甥の豊臣秀次を新しい領主とした。ここから、それまで領主を務めてきた織田氏に代わり、豊臣氏による尾張国の支配がはじまったのである。
実はこの時、様々な事情により、秀吉は異例の対応をして、尾張国の支配をスタートさせた。今回紹介する資料は、まさにこの時期に出された文書で当時の状況を物語っている。この文書は、豊臣秀次の家臣・田中吉政が、加藤隼人(景延)宛てて出したもので、加藤氏が現在支配している領地を今後も保証する、いわゆる安堵状である。宛名の加藤景延は、尾張国熱田の商家・西加藤家の当主である。この文書をもとに、豊臣氏による尾張国支配のはじまりがどのようなものだったのか探っていこう。

(次ページへ)



図1 名古屋博物館正面外観 実施設計パース図より

中空耳環 ―名古屋市博物館所蔵資料より 2 例の報告―

廣瀬 正嗣

はじめに

当館が所蔵する高蔵 1 号墳(名古屋市熱田区)出土資料および東禅寺 2 号墳(名古屋市守山区)出土資料の中に、中空耳環を 2 例(計 3 点)確認した。中空耳環は、一般的な耳環に比べて発見数が少なく、希少性が指摘されている資料であることから本紙面を借りて報告したい。

1 中空耳環とは

耳環は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけて作られた金属製の耳飾りである。全国各地の古墳から数多く出土しており、棒状の金属を環状に曲げて作られ、内部が詰まったものが一般的である。しかし、一部には管状の金属を曲げて製作されたものがあり、これらは内部が空洞であることから「中空耳環」と呼ばれる。中空耳環の出土数は一般的な耳環に比べて圧倒的に少なく、その 1 割にも満たないとされている(岩橋 2022)。さらに、中空耳環は古墳群の中でも中核的な古墳から見つかること、使用素材に限られ、高い製作技術が必要なことなどが指摘されており(小池 1987、辻村 1997)、通常の耳環よりも社会的に優位性の高い副葬品であったと考えられる。

近年、中空耳環を全国的に集成した岩橋孝典の研究によれば、東海地方における中空耳環の確認は数点にとどまっており、特に愛知県においては豊橋市と岡崎市の計 5 点のみで、名古屋市内での出土は挙げられていない(岩橋

2022)。ここでは、高蔵 1 号墳出土の中空耳環を耳環 1・2、東禅寺 2 号墳出土の中空耳環を耳環 3 として報告する。

2 高蔵 1 号墳出土資料について

高蔵 1 号墳は、名古屋市熱田区の高座結御子神社境内とその周辺に分布する高蔵古墳群の 1 基で、古墳時代後期・終末期に造営された横穴式石室を内蔵する円墳である。昭和 29 年(1945)に名古屋大学(文学部)考古学教室(澄田正一・橋崎彰一ら)が石室の発掘調査を実施し、その翌年に調査成果が報告されている(橋崎 1955)。

出土資料は令和 2 年(2020) 3 月に当館へ寄贈された(110-228・高蔵 1 号墳出土資料・76 点)。計 8 点の耳環があり、そのうち 2 点が中空耳環である¹⁾。

耳環 1(図 1 の 1、図 2 の 1) 外径 縦 3.0 cm×横 3.3 cm、断面径 縦厚 0.85 cm×横厚 1.15 cm、重量 10.1 g を測る。X 線画像分析を実施したところ、内部の空洞がはっきりと写り中空構造が確認できた(図 3)。また、成分分析より少量の砒素を含む銅管の上に水銀が検出されたことから、金鍍金が施されていたと考えられる。開口面には筒の形状に合わせた銅板が貼られているが、その重ね合わせ方法は不明である。高蔵 1 号墳出土耳環の中では最大級品だが、中空のため軽量である。断面は楕円形を呈する。

耳環 2(図 1 の 2、図 2 の 2) 外径 縦 3.0 cm×横 3.2 cm、断面径 縦厚 0.8 cm×横厚 1.05 cm、重量 10.9 g を測

る。耳環 1 と同様、X 線画像分析より中空と判明した(図 3)。また、成分分析より少量の砒素を含む銅管の上に水銀が検出されているため、金鍍金が施されていたと考えられる。開口面には筒の形状に合わせた銅板が貼られている。銅板の重ね合わせ方法は不明。耳環 1 とほぼ同形同大であり、出土位置も近いためペアとして使用された可能性が高い。高蔵 1 号墳出土耳環の中では最大級品ながら、中空のため軽量である。断面は楕円形を呈する。

3 東禅寺 2 号墳出土資料について

東禅寺 2 号墳は、名古屋市守山区の竜泉寺丘陵の北側、庄内川に向かって広がる段丘の先端に立地する東禅寺古墳群の 1 基で、古墳時代後期・終末期に造営された横穴式石室を内蔵する円墳である。出土遺物の中から、銀象嵌を施した装飾付大刀の鏝が見つかったことが過去に報告されている(松村 1981)。

出土資料は長らく当館にて保管されていた旧守山市の考古資料に含まれており、令和 4 年 2 月に受入手続が完了している(110-232・東禅寺第 2 号墳出土資料・20 点)。計 2 点の耳環があり、そのうち 1 点が中空耳環である²⁾。

耳環 3(図 1 の 3、図 2 の 3) 外径 縦 2.7 cm×横 2.8 cm、断面径 縦厚 0.7 cm×横厚 0.79 cm、重量 4.7 g (欠損ありのため参考値)を測る。内部芯材や表面被覆材は不明。片側開口面における銅板の蓋が剥落しており、内部が空洞であることが目視確認できたため、中空と判断した。また、剥落部の観察より、開口面の端部が内側に折り込まれている構造が確認され(図 4)、その上に銅板を重ねて蓋をしていたことが推測できる。なお、剥落部における環体の厚みは 0.1 cm 程度であった。高蔵 1 号墳出土の中空耳環に比べ小型で、参考値ながら半分程度の軽さである。断面は楕円形に近い。

脚注

- 橋崎の成果報告(橋崎 1955)で中空耳環の可能性が指摘されているが、掲載実測図は中実の表現となっている。
- 犬塚康博による東禅寺 2 号墳の研究報告(犬塚 1982)に、中空構造を表現した実測図が掲載されている。



図 4 東禅寺 2 号墳出土の中空耳環 開口面端部の折り込み(▲印部分)

おわりに

当館が所蔵する中空耳環 3 点について簡単に報告した。中空耳環は 6 世紀後葉に出現し、600 年前後に最盛期を迎え、7 世紀中葉過ぎには衰退することが先行研究によって示されている(辻村 1997、横田 2018)。高蔵 1 号墳および東禅寺 2 号墳から出土した中空耳環は、その法量や断面形から判断すると、中空耳環の最盛期である 7 世紀初め頃から中葉までの範疇に収まる時期のものと考えられる。また、高蔵 1 号墳の中空耳環については、ガラス小玉一連が接して出土したとされており、耳環を着装していた被葬者の性別を探る手がかりになる可能性がある。今後、所属時期や出土状況について詳しく検討していきたい。

耳環は全国的な出土数の多さから、その概数さえ不明な遺物である。一方、希少とされる中空耳環についても、正確な数はいまだ不明な状況にある。その一因として、見た目だけでは中空かどうかの判別ができない点が挙げられ、通常の耳環よりもやや太身に見える個体や、手に持った際に見た目よりも軽い印象を受ける個体は、中空耳環である可能性をまず疑うべきだと指摘がある(岩橋 2022)。

当館はまだ多くの耳環を所蔵している。上記の指摘に留意しつつ、今後の整理および調査業務を進めていきたい。

参考文献

- 犬塚康博 1982 「名古屋市守山区東禅寺古墳群に関する覚え書」『名古屋市博物館研究紀要』第 5 巻 名古屋市博物館
岩橋孝典 2022 「再考・中空耳環―島根県内出土例を理解するための一試案―」『古代文化研究』第 30 号 島根県古代文化センター
小池寛 1987 「中空耳環について」『京都府埋蔵文化財論集』第 1 集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター
辻村純代 1997 「耳環考」『古文化談叢』第 39 集 九州古文化研究会
橋崎彰一 1955 「名古屋市熱田区高蔵第一号古墳の調査」『名古屋大学文学部研究論集』XI 史学 4 名古屋大学文学部
松村冬樹 1981 「名古屋市守山区東禅寺 2 号墳出土の銀象嵌遺物について」『名古屋市博物館研究紀要』第 5 巻 名古屋市博物館
横田真吾 2018 「熊本県熊本市宮穴横穴群出土の遺物について」『書陵部紀要』第 69 号 宮内庁書陵部

新領主不在の間に出示された文書だが、翻刻の傍線部②には「御朱印の内容のとおり支配をするように、と申しつけられました。」とあり、誰かの命令を受けて出示されたものとわかる。秀次は出陣中で指示が出せない中、誰が命令したのか。この疑問を解くキーワードは「御朱印」である。当時、「御朱印」つまり朱印状を発行できたのは、秀吉しかいない。秀次が不在という状況をうけ、秀吉は小田原の戦いの後、京都に戻る道すがら、天正十八年八月末頃尾張国清須に立ち寄り、尾張の政務に着手した。この文書は、この時に秀吉が命じて田中に出させたものである。

まず、文書の差出人に注目しよう。この文書は新しい領主である秀次の家臣・田中吉政が発行している。しかし、土地の領有を保証する文書は、領主本人から出されるのが通例である。なぜ領主ではない田中がこの文書を出したのだろうか。翻刻の傍線部①を見ると「秀次様が(尾張国に)到着されましたらすぐに、正式な文書を準備して再び届けます。」とある。このとき、秀次は小田原の戦いの戦後処理のため、東北に進軍し、尾張国にいなかったのだ。

傍線部①

中納言様被成御座
次第二御書相調重而
可進候、

傍線部②
御朱印之旨所務
等之儀可被申付候、

(別表)

秀吉の命令で田中吉政が発行した安堵状の宛名(天正 18 年 8 月～9 月)

日付	宛名
8 月晦日	坂井文助
9 月 3 日	甚目寺(海東郡)
9 月 3 日	上島神明社(春日井郡)
9 月 5 日	那古野天王坊(愛知郡)
9 月 7 日	小松寺(春日井郡)
9 月 7 日	国府宮(中島郡)
9 月 8 日	加藤隼人
9 月 9 日	山田七郎五郎
9 月 9 日	正眼寺(春日井郡)
9 月 10 日	津島社(海東郡) 神主
9 月 10 日	熱田社(愛知郡) 社人中
9 月 14 日	杉浦九三郎
9 月 22 日	密蔵院(春日井郡)

天正十八年、豊臣氏による尾張国の支配のはじまりは、領主が不在という状況で始まった。不在の新しい領主・秀次の代わりに、尾張国に入り政務を担ったのが秀吉であった。秀吉が尾張国に到着してすぐ、同年八月二十七日付で、秀吉本人が、熱田・清須町に制札を与えている。これにより、まずは尾張国の経済的な二大拠点をおさえたことしたのである。その後、同年八月三十日から九月二十二日にかけて、秀吉の命令で田中吉政が領地を保証する安堵状を出している。同様のものが尾張国内で十三通確認されており(別表)、その一通がこの文書である。領主の交代にあたり、尾張国内の人々は自身の領地を確保するため、新しい領主に領地を認めてもらう必要があった。新しい領主に求められた対応を秀吉が行ったものである。

では、なぜ秀吉は秀次の到着を待たなかったのか。日付に注目しよう。この書状は九月八日付である。旧暦の九月は現在の十月にあたり、年貢徴収の時期に差しかかる。領主の立場としては、年貢の徴収が本格化する前に、領地を保証し、新領主への年貢を確実に徴収できるようにする必要があると思われる。

もう一点、この書状の宛名からも、秀吉の思惑を推察できる。加藤景延が当主を務める西加藤家は、代々熱田の有力町人で政治的にも大きな力をもっていた。織田信長の父・信秀がそこに目をつけ、熱田の町をおさえるために、西加藤家を配下においた。以来、織田氏と西加藤家の関係は続いてきた。この西加藤家のように、尾張国には、信長以前の代から、織田氏との関係が続いている有力者や寺社が存在する。この状況下で、織田氏の旧臣である豊臣氏が、領主交代を穏便に済ますためには、迅速な対応が求められたのではないだろうか。

その後、同年九月の末頃、ようやく秀次が尾張に入り、政務にとりかかった。その内容は、尾張に移転してきた自身の家臣への対応が中心である。尾張国の有力者や寺社、町などに対する領主交代に関わる施策については、大部分が秀吉によって進められた。この時、秀吉がとった対応のひとつがこの文書なのである。紹介した十三通の安堵状は、これらの他には類例が確認されていない特異な文書である。このことから、当時の秀吉の対応が極めて異例であったことが推測できる。秀吉のとった行動からは、それほどまでに、スムーズに領主の交代を済ませ、尾張国の支配を確実に進めたいという意思が感じられる。文中には、秀吉の名は一切登場しないが、彼の行動や思考を物語る、とても興味深い資料なのである。

(参考文献)

愛知県史編さん委員会 二〇一八『愛知県史 通史編 3 中世 2・織豊』
下村信博 一九九一『戦国・織豊期尾張熱田加藤氏研究序説』(名古屋市博物館研究紀要 十四)

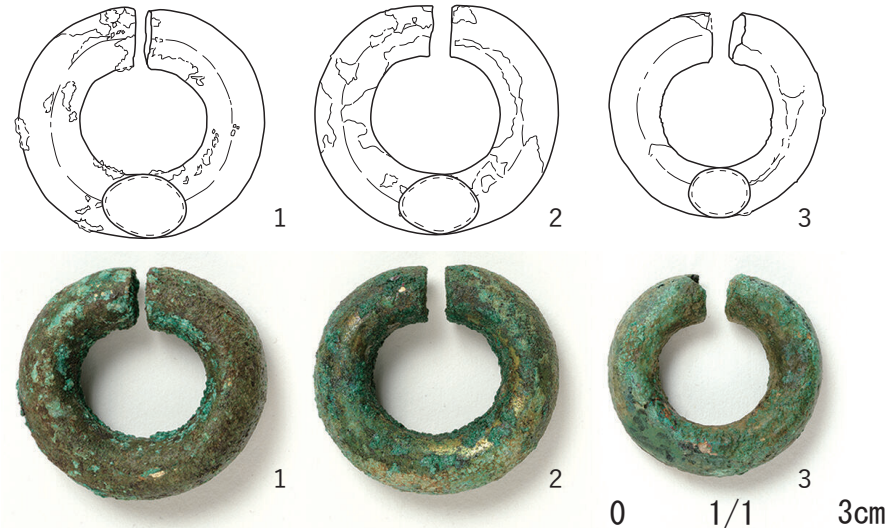


図 1(上) 高蔵 1 号墳・東禅寺 2 号墳出土の中空耳環実測図
図 2(下) 高蔵 1 号墳・東禅寺 2 号墳出土の中空耳環

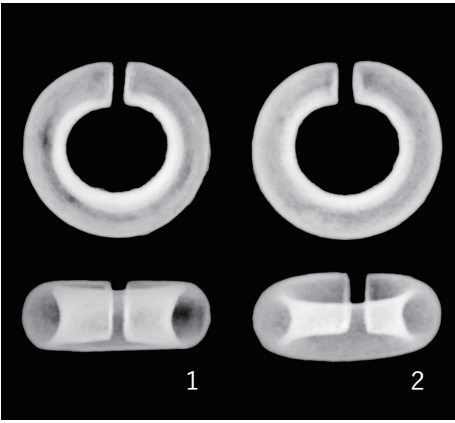


図 3 高蔵 1 号墳出土の中空耳環 X 線画像